

ぞくじょうもんじだい さつもんじだい

# 3. 続縄文時代・擦文時代

## 「縄文の文化」は続く、続縄文時代

国際理解

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん



■：続縄文文化の広がり。続縄文時代後半期には続縄文の土器が、東はエトロフ(択捉)、北はサハリン南部、南は新潟県や仙台平野まで広がった。

およそ2,500年前から、本州以南には水田での米作りと金属の道具を使う文化が広がり「弥生時代」に入ります。

一方、北海道、そして十勝では米作りがおこなわれず、自然の中から食べ物や道具を得ることを中心とした生活が続けられていき、「続縄文時代(～約1,200年前=7・8世紀ころまで)」と呼ばれます。家も竪穴式住居です。

北海道西南部では、ソバなどの畑も少し作られるようになります。また、本州の東北地方の北部では、米作りが伝わりながらも「続縄文文化」的な暮らしであったようです。

北海道全体で見ると、前半は海での漁がさかんにおこなわれ、後半になると、川での漁がさかんになります。



池田3遺跡で見つかった鉄の道具(つり針?)。(写真:池田町教育委員会蔵)

### 鉄も伝わるが、石器などが中心

およそ2,000年前、池田町の旧十勝川(今は利別川下流)あたりでは、鉄の道具(つり針?)が使われていました。本州からサハリンから、持ちこまれたもののようです。とはいえ、ほとんどの道具は、これまでどおり、石や木、動物の骨や角から作られていました。(池田3遺跡 p98)

この川近くの少し高いところに、竪穴式住居が作られ、墓もありました。

墓の一つには、亡くなった人といっしょに、小さな土器、石器、コハク玉などが入れられました。このコハクは、サハリンからもたらされたのかも知れません。

### 十勝川河口の暮らし

およそ2,000年前、今の浦幌十勝川河口近くに暮らしていた人たちがいました(十勝太若月遺跡:浦幌町)。

ここの丘にも墓が作られていて、コハク玉などが入れられたものもあります。

千数百年前になると、寒くなります。このころからは、同じ丘の少し高いところに、墓が作られました。

中には、シラカンバ(シラカバ)の木の皮を底にした上に亡くなった人を置き、こい緑色やうすい青色の「ガラス玉」などがいっしょに入れられた墓もありました。ガラス玉は、弥生文化から持ちこまれたようです。

十勝太若月遺跡で見つかったものは、浦幌町立博物館で見ることができます。



十勝太若月遺跡で見つかった墓が発掘された時の実物大模型。(浦幌町立博物館) (右下)遺跡の位置。浦幌町字下浦幌。



十勝太若月遺跡のガラス玉。(写真:浦幌町教育委員会蔵)



1 竪穴式住居(たてあなしきじゆうきょ): 地面を数cmほり下げて床(ゆか)と壁(かべ)にして、柱を数本立てた上に草や樹皮の屋根をかぶせてつくる住居。(p85)  
2 旧十勝川(きゅうとしかがわ): 十勝川は、昭和12年(1937)の工事までは池田市

街近くを流れていた。(p190)  
3 浦幌十勝川(うらほるとしかがわ): もともとの十勝川下流部。昭和38年(1963)の工事で、十勝川と切りはなされてこの名前がついた。(p208)

## 海から内陸の暮らしへ

続縄文の人々は、海ぞいの暮らしからだんだんと内陸の川ぞいでの暮らしへ移っていきました。

十勝ではありませんが、石狩川河口から20km上流の千歳川合流点近くでは、サケがとられ、その加工がおこなわれていました（江別太遺跡：江別市）。

川が曲がったところで、川底に木のくいをならべて打ちこみ、ブドウづるやヤナギの枝をからめたしかけをつくっていました。ヤスやモリ、あるいは釣りざおなども使われていたようで、丸木舟をこぐ櫂も見つかっています。

今の札幌駅周辺の旧琴似川の支流でも、サケがとられ、焼き干しやくんせいづくりなどの加工がおこなわれていました（K135遺跡：札幌市）。

この場所からは、本州の弥生文化の土器と、サハリン方面の土器が見つかっています。ここで加工したサケを「輸出」し、かわりに土器を手に入れたのかも知れません。

十勝の内陸では、音更川の上流、今の糠平湖岸で、高さ35cm、口の直径が32cmもある、大きな土器が見つかっています（糠平湖岸遺跡：上士幌町）。黒曜石を取りにきた人が、キャンプをしてナベに使ったのでしょうか。

それにしても、下流からここまで土器を運んでくるのは大変なことです。かなり苦労したことでしょう。



江別太遺跡(江別市)で、サケの骨が見つかったところ。ほかにススキの骨も見つかっている。(写真:江別市郷土資料館蔵)



糠平湖岸遺跡で見つかった続縄文時代の土器。(帯広百年記念館埋蔵文化財センター：7)



糠平湖岸遺跡の位置。上士幌町。糠平湖は昭和時代にできたダム湖。

## もう少し細かいこと

### なぜ北海道に「弥生」はなかった？

おおざっぱに言えば、「弥生文化＝水田稲作（米作り）」です。北海道にも、米は伝わっていました。しかし、水田稲作は明治になるまでおこなわれませんでした。

北海道が寒かったために、水田がうまくいかなかった、ということもあるでしょう。

ただ、それよりも、秋にもっと確実な「サケ」という自然の「収穫」があったことが大きな理由だったのではないのでしょうか？ その年々の気候に左右されず冷害もなく、安定して冬越しの食べ物を手に入れることができていたのです。

### 続縄文文化とアイヌ文化のつながり？

続縄文時代に続いて、北海道は「擦文時代」そして「アイヌ文化期」へと移っていきます。

続縄文時代後半の土器の文様（もよう）には、アイヌ文化の文様（p133・p141）を思い起こさせるものがあります。つながりがあるのかも知れません。



続縄文時代の土器の文様。

### 東西に分かれる続縄文前期

続縄文文化と一口でいいますが、前半と後半に分かれます。

前半期には、北海道の中でも東西で異なった土器の文化に分かれます。西南部では「恵山式」という、弥生文化とのかかわりが大きな土器が使われ、東北部（十勝も）では「宇津内式」や「下田ノ沢式」という土器が使われます。

後半期には、北海道全体が「後北式」という土器を使う文化にふくまれ、この土器はサハリン南部から本州東北地方まで広がりました。

### 「玄関」のついた家

十勝では見つかっていませんが、続縄文時代の竪穴式住居には、一部分がつき出た形の竪穴がつくられたものがあります。出入り口だったようです。こうしたつくり方は、もっと緯度が高い北の地域に住む人たちの家とよく似ています。

復元された「玄関」のある竪穴式住居。(写真:北澤実氏)



4 浦幌町立博物館（うらほろちょうりつはくぶつかん）：浦幌町字桜町16-1らぼろ21  
内電話 015-576-2009  
5 焼き干し（やきばし）：魚を焼いてから干して、保存性を高めたもの。

6 くんせい（燻製）：魚や肉をけむりでいぶして、保存性（や風味）を高めたもの。  
7 帯広百年記念館埋蔵文化財センター（おびひろひゃくねんきねんかんまいぞうぶんかざいセンター）：帯広市西23条南4丁目26 電話 0155-41-8731 日・月曜日休館

第1章 十勝の平野や川ができるまで  
第2章 先史時代と川  
第3章 アイヌ文化と川  
第4章 十勝開拓と川  
第5章 発展 そして未来へ

用語 さくいん